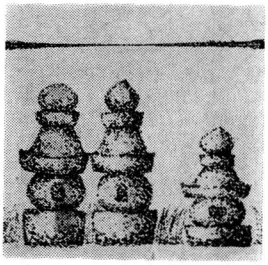
第372号 昭和51年6月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日第三種郵便物認可

昭和51年（1976年）
6月号（No. 372）
社団法人 日本山岳会
（J. A. C.）
定価一部 150円

目　次

夫婦会員は会費を減額
—日本山岳会昭和51年度総会—……（1）
「劔の大瀑行」余聞（湯口康雄）…（2）
辻村伊助さんのこと（麻生武治）…（3）
新聞の誤報について（山本良三）…（3）
第4回山岳史懇談会・旧制甲南高校
山岳部を語る……（4）
第7回山岳図書を語る夕べ
谷文晁「名山図譜をめぐって」…（5）
日本山岳会昭和50年度事業報告……（6）
会務報告・会員動向……（9），（11）
カット／谷アユ子



夫婦会員は会費を減額

日本山岳会昭和五十一年度総会無事終了

日本山岳会の昭和五十一年度通常会員総会は、去る四月二十四日（土）午後三時三十分から、東京千代田区神田駿河台の全電通労働会館会議室でおこなわれた。

三月三十一日現在の会員数は、三三四一名（名誉会員一二、永年会員二四、終身会員五六、通常会員三二四九）で、総会開催の定足数一一一四に対し、出席者（委任状含む）は一三一六名であった。

浜野吉生常務理事の司会で開会、まず、今西錦司会長から会員の異動状況（前掲）の報告があり物故会員一三名（別記）に対し黙祷がささげられたのち議事に入った。

五十年度事業報告は、浜野吉生総務担当理事からおこなわれ、創立七十周年記念講演と映画の会を東京と大阪で開き盛会であったこと、三月二十日、新入会員オリエンテーションをおこなったこと、『覆刻 日本の山岳名著』『高所登山研究』の出版がおこなわれたことなどが報告された。

次いで山本健一郎財務担当理事から収支決算・財産目録（別掲）について説明があり、林監事から監査報告がおこなわれた。

上高地山研建設収支については山本同理事から報告があり、建設費の総額は一四、一八〇、二二二円、これに対し第一次募金収入が五、一九六、四四三円、第二次募金が四八一、七四六円、その他は自転車振興会からの補助金、利根川印刷社長寄付金、立替金である旨報告、承認された。

昭和五十一年度の事業計画案では、日印合同のカメット女子隊が四月二十九日に出発すること、パミール・コーカサスに学術登山隊を派遣すること（朝日新聞社後援）などが浜野理事から報告され、また、日本山岳会として自前のルームを持つことができるよう、準備を慎重かつ早急におこなう旨報告があり、次に報告された五十一年度予算案、定款一部改正（後述）とともに承認された。

また、五十一年度役員（監事）選任の件は、林監事の退任にともない、太田監事の留任と飯野亨氏の新任となり、最後に除籍者（別掲）が発表され、ともに承認されて予定の全議事を終了した。

＜定款一部改正の要点＞夫婦会員の場合は申し出があれば、いずれか一名の年会費を減額し、次の通りとする。東京都、神奈川、埼玉、千葉各県在住者は五五〇〇円、上記以外の国内に在住するものは三〇〇〇円および支部の定める支部費。ただし、会費減額者は「山岳」および「会報」の配布を受けることはできない。

総会後、笠原潤二郎（岩手）、藤島玄（越後）、蒲生明登（信濃）、大沢伊三郎（山梨）、山本朋三郎（静岡）、樋口敬二（東海）、松井辰弥（岐阜）、中田清兵衛（富山）の各氏から次のように各支部の活動状況が報告された。

＜笠原氏＞七十周年記念行事としてカラコルムへ遠征。登頂成功したがひとり滑落死亡。

＜藤島氏＞六月二十日に支部創立三十周年記念山行を苗場山でおこなう。新潟県と隣接県の一等三角点の山を編集出版すべく準備しているが、うまく進捗しない。

＜蒲生氏＞現在在籍会員一一〇名。一般会計九六万円、うちウェストン祭関係で八六万の予算。その他毎月、山行をおこなっている。

＜大沢氏＞在籍会員五五名。十月の第三日曜に金峰山麓金山平で木暮祭をおこなう。

＜山本氏＞十一月第二土・日曜に紅葉会をおこなう。今年は十九年目になり、婦人部からも参加申込みがある。

＜樋口氏＞昨年はカラコルムのラトックへ遠征隊を出し、「東海山岳」三号を発刊。七十周年記念講演会には一〇〇〇名の参会者があった。パミール学術隊には積極的な支援をする。

＜松井氏＞昨年十月に七十周年記念山岳講演会（講師・川喜田二郎氏）をおこない盛会だった。さらに「岐阜山岳」三・四号を発刊。六月の白山集会の概略を説明。

＜中田氏＞在簿会員四四名。小世帯だが活発な活動を行ないたい。

・物故会員・

三枝守博、中司文夫、氏家民雄、村尾金二、小沢利一郎、西井常造、伊集院虎一、石田吟松、小林義正、山田力、伊藤秀五郎、古川房雄、藤田佳宏

＜総会出席者・順不同＞

加藤泰安、太田　敬、藤井運平、

ナンダ・デヴィ縦走
カメット登頂を成功させよう

松本熊次郎、岩瀬浩、浅原重継、小林猛臣、吉沢一郎、名須川　浩、皆川完一、神崎忠男、山本健一郎、浜野吉生、浜野正男、山本朋三郎、小林重一、大沢伊三郎、渡辺公平、森川洋佑、山崎安治、井口正男、斎藤俊哉、神原忠夫、千藤保之、高遠　宏、田村俊介、佐藤テル、望月達夫、大森久雄、川崎精雄、松井辰弥、国見利夫、平沢亀一郎、折井健一、清野　恒、原　真、山本良三、古谷聖司、谷口現吉、林和夫、金山淳二、樋口敬二、宮崎幸博、橋本　清、蒲生明登、阿部雅春、飯田　進、船越好文、小原晴子、三田幸夫、島田　巽、武田満子、網蔵志朗、飯野　亨、吉武正子、川越孝次、小倉董子、穴田雪江、須田紀子、小方全弘、三好勝彦、堀田弥一、堀川英司郎、日本　伸、綿織保清、筈見愛子、阿岸充穂、北島光子、鈴木敏雄、宮下秀樹、堀内章雄、笠原潤二郎、山崎金次郎、斎藤平七、藤島　玄、金坂一郎、関口周也、高橋　照、中西豊和、佐々保雄、高木信子、大倉昌身、富田由紀子、宇田川芳伸、田村宏昭、寺村栄一、中河与一、川森左智子、山村正光、越田和男、鈴木　実、岸　栄、三渡忠臣、須浪敏行、安彦六郎、村井米子、小林　力、関口令安、斎藤かつら、関田美智子、武藤　晃、奈須文枝、星野　重、麻生武治、野口末延、今西錦司、織内信彦

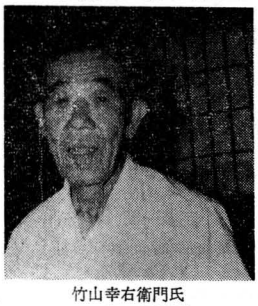
（大森記）

「劔の大瀑行」余聞

湯口康雄

塚本繁松（一八九九～一九四七）は、昭和六年（一九三一）に劔の大滝を探っている。『登山とスキー』の昭和七年六月号に載っている「劔の大瀑行」という記事は、そのときの紀行である。

一九七四年八月、このときの塚本の案内役をつとめた幸右衛門を訪ねた。国家公務員の息子夫婦が帰省するのは盆と正月のみということで、老夫婦だけのかれの家は、黒部川を背にして静まりかえっていた。上がりこんで要件をきり出す。大声で話しかけても、かれはにたりとするだけであった。この「にたり」は、「聞こえないぞ」という合図とみた。補聴器をかけていてこの始末だから、かなりの難聴であろう。しかし、初対面の人にこれ以上の大声は、どうかすれば礼を失することになろう。幸右衛門に寄り添って、わたくしがしゃべるのをどなりつけるように復唱する拡声器の役は、夫人が買って出てくれた。



竹山幸右衛門氏
1974年8月撮影

幸右衛門、姓は竹山。富山県下新川郡内山村（現、宇奈月町内山）の人で、明治三十一年（一八九八）五月十五日生まれ。七十六歳のかれにはしかし、日本電力株式会社などの測量に従事して黒部をわたり歩いた往時の俤はすでになかった。

「わたしは、東京で本を書いているものだが、劔沢の大滝へ案内してもらえまいか。」

幸右衛門によれば、塚本が初めてかれを自宅にたずねてきたときの口上は、およそこのようなものだったという。

「昔から、下から上へ抜けたものはいない。芦峅寺の冠もまだ探っていない。」

とも、

「雪で春はだめだし、夏では水が多すぎる。いまが時期だ。」

とも付け加えたという。

「芦峅寺の冠」云々は、「芦峅寺の山人を連れて歩いた冠松次郎」の聞きちがいであろうが、しかし「アシクラジ」ということばは、幸右衛門にふたつ返事でこの役を承諾させる魔力を秘めていた、と思う。幸右衛門は山案内人ではない。だが、黒部を仕事場にしている関係上、助七あたりから大山村や芦峅寺の衆が、黒部へのりこんできていることは早くから聞いていたであろうし、またそれを眼のあたりにしたこともあったであろう。ついでながら、助七の住む音沢村と内山村は、黒部川をはさんでではあるが、隣接している。内山村はその左岸にある。

幸右衛門はまた、この夏、日本電力株式会社の劔沢測量隊の一員として、大滝までの奔流に幾本もの吊り越しを架設したり、大滝を繞る岩壁に梯子をセットするなどのルート工作をやってのけている。したがって、そこに対する精通度は、当時においては、他のだれよりも高かったはずである。

「黒部のこのおれが――。」

という感情がそのときむらむらと胸をついて出たかどうかは聞きもらしたが、どうかすれば、というより、ここへ恣意的な独断をはさむならば、塚本はそのへんの心理をよんだ上で誘いをかけたのかもしれない。

出発したのは、秋まつりもとうに終わった十一月の六日。落ち葉をまじえてそぼふる秋雨の中を、とにかく鐘釣温泉まではいる。雨は翌日も、秋霖を思わせつつ降り続く。十一月では、それがいつ雪にかわるかわからない。気ははやるが、終日なすことがない。ついに塚本は、

「碁をやろう。」

と、もちかける。

「知らんのだが――。」

と、幸右衛門。

「なら教えてやろう。」

という次第で、ふたりは碁盤をにらむ。だが、気はうつろ。

八日、雨があがる。すでに紅葉を散らしてしまった奥鐘山を対岸に仰ぎながら、ふたりはいそいそと日電歩道を行く。

半月峡の吊り橋は、雪害を予想して、三枚に一枚のわりでしか桁が残っていなかった。塚本は、この橋をほとんど揺らさずに渡り終えたという。都会の人にしては、と幸右衛門はその身軽さに舌をまく。

この日は十字峡泊まり。ここでふたりは、火事騒ぎを起こす。焼いたのは、カヤぶきの小屋だったが、中にダイナマイトがしまってあったとかなかったとかいう幸右衛門のゆれる記憶をもとに、大いにあわてる。その一部始終が「劔の大瀑行」に描かれている。ただし、出火の原因は、幸右衛門の記憶とくいちがう。

「劔の大瀑行」では、それを夕食の準備中としているが、幸右衛門は、食事も終え、明日にそなえて横になり、おたがいにまどろみかけたころだという。小屋の奥の方に、といっても、奥も入口もな

辻村伊助さんのこと

麻生武治

『山』の二月号のトップに伊藤秀五郎君の書いた「山の先輩たち」を読んで僕にも感あり。と申すのは辻村伊助さんとその著『スウィス日記』を回想するからである。

一九二二年晩春から初夏にかけて湯本の箱根旧道から小径に入った瀟落たるその住いに辻村さんを度々お訪ねした私も、今は七十路も後半に入って何時此世におさらばするか明日知れぬ身故、思い出を語り大先輩を偲び、且つ先達逝くなった伊藤君にも追悼の意を捧げたい。

かつて赤坂溜池の三会堂で山の講演会があった時年齢は異ったって同じ会員なんだから別に紹介者もなく、若輩の私は名乗り出て箱根の辻村邸をお訪ねするお許しをとりつけた。五月、六月にかけて日毎に緑の濃くなる箱根旧道は真に静かであった。簡素な枝折戸から邸内に入ると、それこそ百花繚乱一面の山草である。山では七月にならぬと咲き初めぬ花も此辺では満開だった。

日本で本格的なロックガーデンを最初に造ったのは辻村さんだときく。常助お兄さんの経営されていた辻村農園は、今の国鉄小田原駅のところにあったのだが、停車場が新設されるについて伊張山へ移転し、伊助さんはローザ夫人と梓、穂高、榛名の三人のお子さんと湯本に居を構えられた。当時高山植物の生品を持っておることでは日本で辻村さんの右に出る人はないと言われたものだ。高山植物の研究培養の傍、小田原の県立高等女学校で植物の先生もしておられたとは、つい四、五日前参議院議長公邸で集りがあった時、河野謙三君の奥さんから聞いたばかりだ。

日本人としては背も高いハイカラな辻村さんが、オリーブ色のティロール帽に羽をつけて小田原の町を歩いたら随分人眼についただろうが、古き良き日々であったにちがいない。

奥さんの郷里シュピエツのトゥーン湖畔から辻村さん自身の撮った山容麗しいニーセンの透明陽画を懸けた窓辺で、ローザ夫人手作りのビスケットを添えてカフェーを啜りながら辻村さんのお話をきいてスイスを夢みていた私は真に恵まれた青二才だったと自認している。

（一九七六年五月）

新聞の誤報について

山本良三

昨年十二月二十八日、東京の朝刊各紙は社会面に次のような記事をのせた。

「二十七日、午後一時二〇分頃、長野県木曽郡王滝村の同村営御嶽スキー場第三リフトに乗っていた東京農工大学教授森本弘文(54)氏は、同リフトの第四支柱付近で背負っていた重さ約三〇キロのリュックサックが落ちかかり、リュックサックの肩ひもで首を絞められた格好になって死亡した。

森本さん達は同大生ら四人のパーティで、御嶽山へ登山する途中で、リフトに乗る際に係員が制止したにもかかわらず、それを振り切ってリフトに乗ってこの事故に遭ったもの」というのである。

故森本教授は静岡大学山岳会員で、静岡時代は山岳部員として、昭和十三年～十五年頃にかけて南アルプスを意欲的に登っている。

遭難当日の夕刻、某先輩から、「森本さんが遭難されたらしいので、いつでも飛び出せる用意をして待機しろ」との連絡があった。

森本さんとは、つい先日羽田空港で会ったばかりであったので驚愕したが、同行者が小久江浅二医師（静大山岳会員、大宮日赤病院内科部長、テラム・カンリ遠征隊医師）とのことにて、少しは安堵した。その後、刻々と情報が入り、様子がわかってきた。

そして翌朝になって例の新聞記事が出たのである。

そこで、まず我々仲間がまっさきに不審に思ったのは、リフトの上で、重さ三〇キロのザックが落ちかかり、肩ひもが首にくい込んだにしても、首の両側から同時に絞められることは考えられず、片側だけが絞まる状態では通常死につながるとは考えにくい、そんな姿勢ではリフトから転落するだろうと思われた。

第二は、「リフトに乗ろうとした際、係員が制止したにもかかわらず、それを振り切って乗った…」という点である。

森本氏や小久江氏の人柄を知る人達は一様に首をかしげた。制止されたのを振り切ってまでもリフトに乗ろうなどという考えを起すような人達では断じてない。何とも納得のいかない記事であった。

そこで、小久江医師の証言と文部省へ提出された災害（死亡）発生状況現認書に基いて事実を明確にしておきたいと思う。

その一、死亡原因については、

いような小さな小屋だが、ともかく奥の方を塚本が、入口近くを幸右衛門が占めていた。寒さがきびしく、炊事に使った入口近くの焚火は、ほだをつけ加えこそすれ、消すということはしなかった。何かの拍子にこれが屋根に燃え移ったらしく、気がついたころは、すでに手のほどこしようがなかった。

それはともかく、おびただしい火の粉を吹き上げながらもえることの火事は、いてつくような夜空を焦がさんばかりのいきおいだった、という。

翌日の記録は、「剱の大瀑行」に詳しいので省くが、明らかにそれは、剱の大滝開拓史の一ページを彩るものであった。しかし、塚本の生存中、このあたりにきわだった登攀は現出しなかった。「幻の大滝」とも呼称されたこの滝の本格的な開拓は、戦後もかなりの年月を経てからであった。

山を
きれいに
ごみは
持ち帰ろう

小久江医師は、「明確な結論は出せないが」と前置きして、「遭難当時森本氏は八〇キロを越す巨体で、日頃から多少心臓が弱っていたところから、心筋梗塞か脳溢血で死亡したあと、リフトの上で荷物と体重とがバランスして転落しなかったのではないか」と見るのが常識的であろうという。

その二、問題のリフトには、小久江、学生A、学生B、森本の順で乗り、係員の指示に従って各人の間はひとつずつ空席を置いた。

そして、切符売場、並びに改札で係員から、荷物の重量や大きさにつき注意を受けたり、リフトの利用を制止された事実はなかった（災害発生状況現認書から抜粋）。

上記二点である。私は、今更当時の報道記事の不確かさを批判するつもりはない。ただ、かなり興味本位に書かれた記事のような印象を受けたので、実はこうであったのだということだけは、本人や御遺族さらには我々仲間の名誉の為にも書き残しておきたい。

●懇談会報告

第四回　山岳史懇談会

旧制甲南高校　山岳部を語る

図書委員会主催の第四回山岳史懇談会が三月十七日、雨中、国鉄ストと重なったにもかかわらず、JACルームに多数の出席者を得て行なわれた。今回は旧制甲南高校山岳部の話であったが、話が四十年、それ以上も前の話で、詳しい記録的なことは記憶にないため山岳部の生いたち、背景、特色といったものが、話の中心になった。

甲南の出席者は、香月慶太氏（現甲南山岳会会長・昭和四年卒）が上京されたのをはじめ、田口二郎（昭和八年卒）、喜多豊治（昭和十二年卒）、伊藤文二（昭和十五年卒）、それに故伊藤愿夫人房子未亡人の各氏が出席され、それぞれの時代について、記憶を思い起こしながら語られたので、以下にその大要をまとめてみた。

香月　旧制甲南高等学校は、大正十二年に七年制の高校（尋常科四年、高等科三年）として発足した。学校が三年制のため、兄弟で在校するものも多く、また全校生がたがいに顔も名前も知りあっていた。山岳部を創ろうと思ったのは、学校のすぐ裏が六甲山で、常に自然に親しんでいたこともあり大正十二年に遠足部なるものを作った。そして十四年に山岳部と名を改めた。その頃、関西ではRCC、関西徒歩会がアクティブであり、また神戸高商が進歩的な山行をしていた。そしてそのアクティブメンバーの一人、三好毅一氏と部員の檀淳氏の兄が親しかったことから、藤木九三氏を紹介され、やがて部員は氏に連れられて、芦屋のロックガーデンに岩登りに出かけるほどになった。私としては山岳部を生み落とした母親のような役目をしたわけで、部員の中から優秀なアルピニストを育てるのが目的であった。この頃、部をリードして行ったのは、大正十二年に高等科へ入学してきた伊藤愿と西村格也の二人だった。特に、愿（愛称ゲンサン）は、比較的おとなしい甲南ボーイの中にあっては野人的な存在であり、自分の信ずることに忠実な、信念の人であった。

当時の甲南の方針として、山行はチームで行なうべきだとの考えであったが、愿は山へ行きたくてその力があれば、チームで行こうが一人で行こうが同じではないかと主張して譲らず、ついにその主張を押し通して、一夏一人でアルプスへ出かけて行き、それによって得た自信で、部報創刊号に「アルピニズム宣言」として載せたのである。

田口　当時われわれは、一年の半分くらいはロックガーデンに入っていて、まるでロックガーデンから学校へ通っているようなものだった。初めの頃は、ロックガーデンで岩登りの練習をしても、それでアルプスへ行こうといったものではなく、必ずしもロックガーデンとアルプスとは結びついていなかった。しかしやがて、剣や穂高へ行くようになって、芦屋で鍛えた岩登りの技術が、そのままアルプスの岩場でも通ずることがわかって、大きな自信を得た。

それからはどんどんむずかしいアルプスの岩場へ出かけるようになった。愿さんたちが京大へ行った後、甲南をリードしたのは兄の一郎と湯川孝夫の二人だと思う。この頃「登高行」や早大の「リュックサック」などを盛んに読んだ。

また京大へ行った愿さんたちの影響も受け、ヒマラヤへの夢が芽生えた。甲南は在学生たちだけで山登りもするが、卒業した人たちも一緒によく登った。常に甲南生と卒業生がオーバーラップして登っていたわけだ。また甲南は非常にデモクラティックな学校で、新人が上級生をあだ名で呼び捨てにしていた。山へ行ってしごくということもなく、非常に和気あいあいとしてなごやかな雰囲気だった。

昭和九年、山岳部が壊滅的な打撃を受けた。思想事件が起こったが、いったいその原因となったものは何だろうか。さきほども香月氏と食事をしながら話したんだがどうも愿さんの革新的な考えが部員たちに影響を与えたのではないか。また早大の革新的な思想の影響も受けたようだ。とにかく甲南の一番大きな部である山岳部で、しかも大半の二十名くらいの人たちが逮捕されてしまったのだから大変な事件だったわけだ。

喜多　私が部に入ったのは、兄の又太郎が部員であったので、なんとなく入ってしまったが、この頃すでに確立され、実績もあげている山岳部を維持していくのにせい一杯であった。私の頃は、白出沢はまだ人が行っていなかったので、盛んに出かけていった。そのため、テントを作ったが、奥行き九尺、幅六尺、ベンチレーター付きという、とても一人ではかつげないような大きなもので、それを持って出かけた。山の食事も贅沢だったと思う。菊正一升十五銭の時代だったが、山の食事は一日五十銭であった。アケボノ印のサケ缶を十九銭で買って持っていったのもよく憶えている。

伊藤　われわれの時代は、香月さんが部を創られて、それが軌道に乗り、いったん思想事件で打撃を受け、再建され、再び軌道に乗って部の活動が確立されたときである。ただ部員も、一所懸命山に登る者、登りたい時だけ登る者な

ど非常に雑多な構成であった。また芦屋のロックガーデンは、阪急の芦屋駅より歩いて二十分くらいで岩場に行けるので、土、日曜の岩登りは、リーダーだけが決まっていて、芦屋の駅に何時集合、ということが掲示され、当日芦屋の駅に集合する。したがって誰が来るのか当日にならなければわからない。わかっているのはリーダーだけというような具合であった。

当時のわれわれの山登りは、尋常科一、二年生は夏山の一般縦走、冬は必ずスキーの練習をする。三年になって、剱や穂高のようないわゆる山登りらしい山登りをする。三年、四年はそのようにして登り、高等科になって初めてリーダーになるための登山、二年になると冬山のリーダーになるための訓練をするというように、段階的な登山法がきちんと決まっていた。したがって、甲南の特徴として、スキーが非常に上手だったと思う。山行としては、冬山など最前線の山小屋へ泊まり、朝二時頃出発して、スキーで行けるところまで行き、夜明けとともに登り出し、日が暮れてから、スキーデポまで降りてきて、スキーで小屋まで帰るような登山であった。

以上順に話をされ、その後雑談になった。特に今回は伊藤愿氏の房子未亡人が出席されたことから愿さんの話題に花が咲いた。当会員でもあった伊藤愿氏について、種々な話も載せたいが、紙面のつごうもあり、別の機会にさせて頂きたいと思う。今回は遠い昔の、多感な少年の情熱を傾けた頃のことを、憶い出し憶い出し語られたのだが、聞く方も自分の若い時代を憶い、また若い人たちも生まれる以前の先達がどのような山行をしていたか、大変参考になったと思う。

最後に、ご出席された方々に、紙面を借りて厚くお礼申し上げます。（飯田進）

▽**出席者** 香月慶太、田口二郎、伊藤房子、田辺潤、大関和夫、大木操、望月達夫、鈴木実、和久井正明、山本良三、今野靖子、井上末子、関田美智子、近藤信行、山崎安治、大橋 晋、折井健一、伊藤文三、喜多豊治、飯田 進、泉久恵、岡沢裕吉

第7回 山岳図書を語る夕べ

谷文晁「名山図譜」をめぐって

三月三十日夜、首都圏の交通ストの日、関根吉郎氏による「名山図譜」をめぐっての楽しい一夕をルームで過ごした。

あいにくのストのために、出席者もすくなく、談話室で酒をくみかわしながらのなごやかな雰囲気のうちに終始した。

文化元年と四年の二度にわたって出版されている「名山図譜」は岩手県出身の江戸の医者で、風流人であったらしい川村寿庵が企画の采配をふるって、南画の創始者である谷文晁に描かせたもので、幕府の権力者への献上本であったらしく、出版部数も限られており、大版で、桐函に入っていたらしい。

山の姿を比較的写実的に描こうとした日本で最初の画家といわれる文晁は、晩年は多作で、筆が乱れていると評されるが、図譜を描くに当っては、日本を広く歩いている。

北海道の山（四点）をはじめ、日本アルプス四点（立山、剱岳、甲斐駒、御岳）を描き、富士山には熱のこもった傑作がある。

その後、文化九年になると「日本名山図会」という名前で三部作（人・地・天）に改編され、江戸、難波、京都、尾張など九つの書物問屋から出版され、版を重ねて明治になってからも出版されている、というから相当の部数が一般庶民にもてはやされたのではないかと思われる。

図会には図譜には見られなかった岩手の名山といわれた、岩手山と東玉山の二点が加筆されている。

関根氏所蔵の図譜は、長年にわたり氏のアパートの本の山の中に埋もれていたせいか、ひどい虫喰い状態で、頁をめくると、紙がボロボロになるかもしれないといった代物。

もったいない話である。

一方、図会は昨今でも時折り入手可能であるが、氏は戦前から、「神田で入手しては、早大山岳部関係の同輩、後輩の結婚祝いの記念品として数十人にプレゼントした」という思い出の本であるという。

司会は例によって、山崎安治さん。氏も関根氏から日本名山図会を結婚記念にプレゼントされた一人である。

いずれ、関根氏に図譜と図会に関することなどを纏めて、「山岳」に書いてもらう予定には致しておりますが、図譜を所蔵しておられる方にお願いがございます。お手数ですが、その奥付を複写して事務局宛に御送付賜りたく、参考資料にさせていただきたく存じます。（山本良三）

▽**出席者** 関根吉郎、山崎安治、山本良三、皆川完一、伊藤博夫、松家晋、菅野弘章、和久井正明

●お知らせ

「世界の山岳地図展」が、東京日本橋丸善本社で六月二十二日～七月三日まで開催されます。入場は無料。また各種地図の頒布も行なわれます。

売場ご案内

山岳随筆雑誌『アルプ』のバックナンバーが揃いました

最新入荷の本

✠雲の中の九ヵ月（サー・エドマンド・ヒラリー 丹部節雄訳）1200円 ✠未知の山（ウィルフリッド・ノイス 野間寛二郎訳）900円 ✠プモ・リ―地上最美の山―（ゲルハルト・レンザー 織方郁映 橋本信訳）1600円 ✠チャムラン―ヒマラヤの詩と真実―（岡本丈夫 久木村久 安間荘 鈴木良博）1400円 ✠パミール―シルクロードの城塞―（田村俊介編著）2500円 ✠遥かなる天山―天山に魅せられた探険家セミョーノフ伝―（A・アルダン＝セミョーノフ 田村俊介）2500円

茗溪堂 <山の本の売場>お茶の水店三階
営業時間 平日・午前10時30分より午後8時
日曜祝日・午後0時30分より午後6時30分

昭和50年度　収支決算書

自昭和50年4月1日
至昭和51年3月31日

1. 総括表

区分	歳入決算額	歳出決算額	差引残高	差引残高の処理 基本財産への編入	差引残高の処理 翌年度への繰越
	円	円	円	円	円
一般会計	34,334,661	33,555,510	779,151		779,151
別途会計	5,587,000		5,587,000		5,587,000
(基本財産編入引当金)		(2,210,000)	(2,210,000)		(2,210,000)
(別途会計編入積立金)		(1,000,000)	(1,000,000)		(1,000,000)
合計	39,921,661	33,555,510	6,366,151		6,366,151

2. 一般会計決算書（歳入）

科目	予算額	決算額	増減（△）
経常収入	**20,950,000**	**22,526,827**	**1,576,827**
入会金	1,950,000	2,211,000	261,000
会費 過年度会費	19,000,000	18,935,161	△ 64,839
次年度会費		780,666	780,666
終身会費		600,000	600,000
事業収入	**4,900,000**	**4,767,816**	**△ 132,184**
広告料	1,500,000	1,123,200	△ 376,800
山日記印税	400,000	380,000	△ 20,000
その他印税		297,865	297,865
刊行物売上	2,500,000	774,820	△1,725,180
その他事業収入	500,000	1,218,500	718,500
山研使用料		973,431	973,431
雑収入	**1,100,000**	**1,175,518**	**75,518**
利息	300,000	354,250	54,250
山岳診療助成金	500,000	500,000	
その他雑収入	300,000	321,268	21,268
寄付金		**200,000**	**200,000**
山研寄付金		**1,029,872**	**1,029,872**
未収金	**4,227,244**	**4,159,774**	**△ 67,470**
過年度未収金	1,235,364	1,235,364	
仮払金	1,930,000	1,930,000	
刊行物等売上未収金	1,061,880	994,410	△ 67,470
小計	31,177,244	33,859,807	2,682,563
前年度からの繰越金	474,854	474,854	
一般会計合計	**31,652,098**	**34,334,661**	**2,682,563**

（歳出）

科目	予算額	決算額	増減（△）
運営管理費	**12,596,000**	**11,768,534**	**△ 827,466**
手当	2,700,000	2,701,200	1,200
文具費	100,000	96,400	△ 3,600
印刷費	850,000	866,435	16,435
交通費	800,000	467,300	△ 332,700
通信費	2,200,000	1,648,337	△ 551,663
家賃	4,096,000	4,164,100	68,100
保険料	80,000	112,700	32,700
営繕費	250,000	240,270	△ 9,730
諸税公費	120,000	171,389	51,389
光熱費	300,000	291,960	△ 8,040
電話料	170,000	194,344	24,344
会議費	50,000	64,730	14,730
交際費	150,000	101,120	△ 48,880
備品費	30,000		△ 30,000
振替料	100,000	125,220	25,220
支部運営費	400,000	354,600	△ 45,400
福利厚生費	50,000	36,000	△ 14,000
雑費	150,000	132,429	△ 17,571
事業費	**10,213,000**	**9,649,443**	**△ 563,557**
出版費	6,738,000	4,658,190	△2,079,810
図書費	320,000	117,970	△ 202,030
調査研究費	880,000	756,540	△ 123,460
指導費	535,000	560,355	25,355
海外諸関係費	100,000	92,900	△ 7,100
名簿発行費	400,000	420,000	20,000
山研運営費	300,000	1,617,319	1,317,319
70周年記念事業費	440,000	738,369	298,369
その他事業費	500,000	687,800	187,800
予備費	**2,000,000**	**2,553,500**	**553,500**
未払金	**1,812,000**	**1,812,000**	
基本財産編入引当金	**1,950,000**	**2,210,000**	**260,000**
仮払金		**280,000**	**280,000**
別途積立金		**1,000,000**	**1,000,000**
山研建設費立替金		**4,282,033**	**4,282,033**
小計	28,571,000	33,555,510	4,984,510
翌年度への繰越	3,081,098	779,151	△2,301,947
一般会計合計	**31,652,098**	**34,334,661**	**2,682,563**

3. 別途会計（編入内訳）

科目	繰越	歳入	歳出	翌年度繰越
	円	円	円	円
終身会費積立金	1,930,000	600,000		2,530,000
ルーム基金積立金	257,000	200,000		457,000
図書購入費積立金	40,000			40,000
退職給与積立金	150,000	200,000		350,000
合計	2,377,000	1,000,000		3,377,000

4. 引当金

円

科目	繰越	歳入	歳出	翌年度繰越
基本財産編入引当金		2,210,000		2,210,000
合計		2,210,000		2,210,000

日本山岳会昭和50年度事業報告

1 登山の指導と奨励に必要な集会講習会および展覧会の開催

(1) 集会

・四月二三日　支部長会議（本会）
・五月一九日　第三二〇回小集会：映画会「三極に挑む」（日仏会館）
・六月一日　第二九回ウエストン祭（上高地）
・六月二〇日　エベレスト日本女子登山隊登頂祝賀会　文部省、他と共催（ホテル・ニューオータニ）
・六月二一日～二二日　第三二一回現地小集会（上高地）
・六月二四日　大学山岳部指導者懇談会（本会）
・八月二〇日　第三二二回小集会：明大チューレン・ヒマール報告（本会）
・九月一〇日　第三二三回小集会：専大ヒマル・チュリ報告（本会）
・九月二〇日　第三二四回小集会：日本女子エベレスト報告（私学会館）
・九月三〇日　第三二五回小集会：都岳連ダウラギリ報告（本会）
・一〇月一八日～一九日　第三二六回現地小集会：集中登山（蓼科山）
・一〇月二〇日　創立七〇周年記念講演と映画の会（東京・九段会館）
講師：槇有恒氏、小西政継氏
映画：「マナスルに立つ」
・一〇月二五日　山岳図書交換会
・一〇月二八日　創立七〇周年記念講演と映画の会（大阪・毎日ホール）
講師：槇有恒氏、中島道郎氏
映画：「マナスルに立つ」
・一〇月三〇日　第三二七回小集会：静大テラム・カンリ報告（本会）
・一一月二〇日　第三二八回小集会：第三回会員会議（湯島会館）

財 産 目 録

昭和51年3月31日現在

1. 基 本 財 産

種　類	預 入 先	金　額
貸付信託	日本信託銀行 本店	1,780,000円
金銭信託	同 上	241,557
貸付信託	三井信託銀行 本店	790,000
金銭信託	同 上	1,413
合　計		2,812,970

2. 運 用 財 産

1）保 証 金

種　類	預 入 先	金　額
保証金	利根川商事株式会社	7,314,000円

2）現金および預貯金

種　類	預 入 先	金　額
現　金		33,578円
普通預金	三和銀行 本郷支店	4,014,062
	協和銀行 神田支店	162,627
	東京銀行 本　店	19,339
定期預金	三和銀行 本郷支店	2,000,000
振替預金	東京振替貯金課	136,545
合　計		6,366,151

3）建　物（上高地山岳研究所）

場　所	長野県南安曇郡安曇村上高地国有林114い林小班
構　造	鉄筋コンクリート造（一部木造）1棟 100.69m²

4）未収金・仮払金

摘　要	金　額
過年度未収金	1,235,364円
歳入決算額	△ 1,235,364
仮　払　金	1,930,000
歳入決算額	△ 1,930,000
刊行物売上未収金	1,061,880
歳入決算額	△ 994,410
差引合計	67,470

5）刊行物・服飾品棚卸現在高

摘　要	金　額
刊行物（山岳・山岳覆刻版等）	1,272,540円
服飾品，記念品（ネクタイ・灰皿等）	2,026,900
合　計	3,299,440

6）図　書

種　類	摘　要	冊　数
和　書	（50年度 受入冊数 97冊）	3,352冊
洋　書	（〃 35冊）	1,303冊

社団法人 日本山岳会 昭和50年度収支決算書及び財産目録を監査し，正確妥当なことを認めます。

昭和51年4月8日

社団法人 日本山岳会
監事 林 和夫
監事 太田 敬

7）什器備品

宛名カードケース（1），新刊書ケース（1），セフネス金庫（1），宛名印刷機（1），ローヤルタイプライター（1），電話（1），雑誌棚（4），折りたたみ椅子（47），机・テーブル（17），スチール黒板（2），両開書庫（8），ファイリングキャビネット（6），マップロッカー（1），コンパック移動書庫（4），キーパー引違書庫（2），移動式踏台（1），スチール書架（4），組立用本棚（1），スクリーン（1），ホールスタンド（3），手提金庫（1），複写機（1），タイプスタンド（2），電気冷蔵庫（1），応接セット（1），折りたたみ運搬車（1），耐火金庫（1），テープレコーダー（1），卓上電算機（1）

8）絵　画

・北穂高岳滝谷（足立源一郎，油—25）・北穂高岳主峯（足立源一郎，油—25）・或朝の槍ケ岳（足立源一郎，油—25）・槍ケ岳（足立源一郎，油—P8）・群猿（石井鶴三 墨絵）・鳥（石井鶴三，墨絵）・徳本峠から穂高連峰（石田吟松，墨絵）・富士山麓（茨木猪之吉，油—A25）・伊豆半島（茨木猪之吉，油—10）・針之木峠（茨木猪之吉，油—10）・初冬の両神山（茨木猪之吉，油—10）・モンブランメールドグラス（シュラギットワイト，エッチング）・北岳（高遠宏，版画）・白馬岳（中村清太郎，油A—50）・田代池の白樺（中村清太郎，油—変型6）・後立山連峯（中村清太郎，水彩）・槍ケ岳初夏（中村清太郎，油—10）・ユングフラウ（山里寿男，油—10）・涸沢より北穂高（山里寿男，水彩—6）・カンチェンジュンガ（矢崎千代子，パステル画）・ブカヒルカノルテ（渡辺九郎，水彩）

・一二月六日 支部長会議（本会）
・一二月六日 創立七〇周年記念晩餐会（京王プラザホテル）
・一二月一九日 第三二九回小集会：忘年会（本会）
・一二月二一日 第三三〇回小集会：もちつき大会（綾瀬・観音寺）
・一月一五日～一八日 第三三一回小集会：スキー親睦会（八方尾根）
・二月一二日 テンジン・ノルゲー氏歓迎会（湯島会館）
・二月二〇日 第三三二回小集会：支部懇談会（伊吹山）
・三月一七日 山岳史懇談会：旧制甲南高校山岳部の足跡（本会）
講師：香月慶太氏、田口二郎氏
・三月二〇日 第三三三回小集会：新入会員オリエンテーション（本会）
・三月三〇日 山岳図書を語る夕講師：関根吉郎氏（本会）

(2) **研究会**

・一二月一一日 雪崩シンポジウム（岸記念体育館）
・三月一三日～一五日 高所登山研究会（立山・文部省登山研修所）

(3) **講習会**

・四月二三日～五月四日 海外登山研修会（ネパール・ヒマラヤ山麓）
・五月二四日～二五日 第一五回登山技術講習会（谷川岳）
・八月一〇日～一六日 穂高涸沢テント集会（涸沢，上高地）
・一一月二二日～二三日 第一六回登山（雪上）技術講習会（富士山）

2 登山施設の改善、その他登山のための適切な事業

上高地山岳研究所を六月より一一月まで開所。集会、青年懇談会、婦人懇談会、高所登山委員会、図書委員会による研究会を開催した。

3 山岳遭難の予防とその対策に関する企画および指導

昭和51年度収支予算書（案）

自 昭和51年4月1日
至 昭和52年3月31日

1. 総括表

区分	歳入予算額	歳出予算額	差引残高	差引残高の処理 基本財産への編入	差引残高の処理 翌年度への繰越
一般会計	29,700,901円	28,315,000円 (2,250,000)	1,385,901円	(2,250,000)円	1,385,901円
別途会計	5,587,000	2,210,000	3,377,000	(2,210,000)	3,377,000
合計	35,287,901	30,525,000	4,762,901	(4,460,000)	4,762,901

2. 一般会計予算書（歳入）

科目	予算額	前年度予算額	増減（△）
経常収入	**21,250,000**	**20,950,000**	**300,000**
入会金	2,250,000	1,950,000	300,000
会費	19,000,000	19,000,000	
次年度会費			
終身会費			
事業収入	**6,211,000**	**4,900,000**	**1,311,000**
広告料	1,225,000	1,500,000	△ 275,000
山日記印税	456,000	400,000	56,000
その他印税	2,230,000		2,230,000
刊行物売上	500,000	2,500,000	△2,000,000
その他事業収入	800,000	500,000	300,000
山研使用料	1,000,000		1,000,000
雑収入	**1,100,000**	**1,100,000**	
利息	300,000	300,000	
山岳診療助成金	500,000	500,000	
その他雑収入	300,000	300,000	
未収金	**360,750**	**4,227,244**	**△3,866,494**
過年度未収金		1,235,364	△1,235,364
仮払金		1,930,000	△1,930,000
刊行物等売上未収金	360,750	1,061,880	△ 701,130
小計	28,921,750	31,177,244	△2,255,494
前年度からの繰越金	779,151	474,854	304,297
一般会計合計	**29,700,901**	**31,652,098**	**△1,951,197**

（歳出）

科目	予算額	前年度予算額	増減（△）
運営管理費	**14,430,000**	**12,596,000**	**1,834,000**
手当	3,300,000	2,700,000	600,000
文具費	120,000	100,000	20,000
印刷費	1,000,000	850,000	150,000
交通費	800,000	800,000	
家賃	2,400,000	2,200,000	200,000
保険料	4,900,000	4,096,000	804,000
営繕費	40,000	80,000	△ 40,000
諸費	250,000	250,000	
光税	130,000	120,000	10,000
電熱費	330,000	300,000	30,000
会話料	200,000	170,000	30,000
交際費	50,000	50,000	
備品費	150.000	150,000	
振替		30,000	△ 30,000
支払手数料	140,000	100,000	40,000
福利厚生費	420,000	400,000	20,000
雑費	50,000	50,000	
	150,000	150,000	
事業費	**9,635,000**	**10,213,000**	**△ 578,000**
出版費	5,765,000	6,738,000	△ 973,000
図書費	300,000	320,000	△ 20,000
調査研究費	760,000	880,000	△ 120,000
指導費	680,000	535,000	145,000
海外諸関係費	120,000	100,000	20,000
名簿発行費		400,000	△ 400,000
山研運営費	1,510,000	300,000	1,210,000
70周年記念事業費		440,000	△ 440,000
その他事業費	500,000	500,000	
基本財産編入	**2,250,000**	**1,950,000**	**300,000**
未払金		**1,812,000**	**△1,812,000**
予備費	**2,000,000**	**2,000,000**	
小計	28,315,000	28,571,000	△ 256,000
翌年度への繰越	1,385,901	3,081,098	△1,695,197
一般会計合計	**29,700,901**	**31,652,098**	**△1,951,197**

3. 別途会計

科目	歳入予算額	歳出予算額	差引残高	翌年度への繰越
別途積立金	円	円	円	円
前年度からの繰越	3,377,000		3,377,000	3,377,000
小計	3,377,000		3,377,000	3,377,000
引当金				
前年度からの繰越	2,210,000	2,210,000	0	0
小計	2,210,000	2,210,000	0	0
合計	5,587,000	2,210,000	3,377,000	3,377,000

各大学医学部、山岳部による夏山診療所開設（七月～八月）
（槍ケ岳、五色沼、唐松、三俣山荘、白馬岳、合戦小屋、立山、尾瀬）

4 自然保護活動

環境庁との連けいを密にし、国立公園内における山岳地の自然保護への協力。

5 海外登山の指導

海外登山における無事故登山を目的に適切な指導を行なう。

6 機関紙などの発行

(1) 「山岳」六九年：一二月発行
(2) 会報「山」第三五八～三六九号発行
(3) 「山日記」一九七六年版：一一月発行
(4) 「高所登山研究」の刊行（山と溪谷社）
(5) 七〇周年記念出版として「覆刻日本の山岳名著」の刊行（大修館）

7 目的を同じくする外国との情報交換

(1) 三〇ヵ国六〇の団体との情報を交換した。
(2) UIAA総会（九月四日～六日、オーストリア・オーバータウエルン）に会員・佐藤テル氏が出席した。

昭和51年度事業計画（案）

1 登山の指導奨励に必要な集会・研究会・講習会の開催

(1) **集会**
- 小集会（報告会、講習会、シンポジウム）　本会、その他一五回
- ウェストン祭　上高地　六月六日
- 山岳図書を語る夕　本会
- 山岳史懇談会　本会
- 山岳図書交換会　本会
- 年次晩餐会　一二月四日
- 来日外国登山家との交歓

(2) **研究会**
- 高所登山研究会

(3) **展覧会**
- 山岳絵画展

2 登山施設の改善その他登山のための適切な事業
- 上高地山岳研究所開所　五月～一一月

3 山岳遭難の予防とその対策に関する企画および指導
- 夏山診療所開所　七月～八月（槍ケ岳、五色沼、唐松、三俣山荘、白馬岳、合戦小屋、尾瀬、立山）
- 雪崩シンポジウムの開催
- 雪氷登山技術講習会の開催　富士山

4 自然保護活動の推進
- 国立、国定公園内に於ける自然保護活動に協力

5 海外登山の企画および指導
- インド登山財団とのジョイントで、カルワル・ヒマラヤ（インド）にナンダ・デヴィ縦走隊とカメット峰登山隊（女子隊）を派遣する
- パミール・コーカサス国際キャンプに参加する
- 海外登山における無事故登山を目的に会員へ適切な指導を行う。

6 機関誌などの刊行
- 「山岳」七一年発行
- 会報「山」第三七〇号～三八一号発行
- 「山日記」昭和五二年版編集発行
- 「高所登山研究」編集、発行
- 「覆刻　日本の山岳名著」第二期を企画、編集
- 学生部「年報」発行
- 「登山技術」（改訂版）企画、編集

7 目的を同じくする国内および国外団体との連絡をとり情報の交換を行う
- UIAA総会への代表派遣

8 その他
- その他目的を達成するため必要な事業を行なう。

・昭和51年度除籍者氏名

会員番号	氏名	支部
3384	王置　誠一	
4371	熊谷とも子	
4402	増田　昌司	
4784	島田興史朗	
4792	山田　隆三	
4831	竹田　吉文	
4878	松方　峰雄	
4946	川泉　毅	
4978	村石　幸彦	
4985	石田　寿郎	
5133	小堤　達雄	
5702	秋山　正人	
5772	井村　英明	
5847	稲田　房子	
5952	古屋　勝彦	
6110	松島　利夫	
6112	三方　淳男	
6149	上田　富雄	
6170	錦織　英夫	
6179	青木　敏	
6265	石川　正弘	
6483	伊吹　一郎	
6517	木村　泰助	
6533	白井　和彦	
6767	佐藤　俊三	
6808	星野　和久	
6923	関口　博敏	
6987	八巻　立	
7085	国際商科大学体育会山岳部	
7101	渡辺　正明	
7200	John Logan Kemple	
7376	荒井　文隆	
7388	土肥　芳則	
7400	上原　真一	
7405	柳川　秀夫	
7535	青山　原大	
7611	板倉　昌子	
7616	中島　正晴	
7620	安川　英利	
7674	渡辺百合子	
7676	小柳せい子	
7678	吉田　久枝	
6799	大久保　章	北海道
7059	宮下　弘	〃
7104	山本　直也	〃
7228	河西　憲二	〃
7706	国実　貞雄	〃
7113	磯野　紀夫	岩手
4701	栗山小八郎	秋田
3230	福島商業高校山岳部	福島
3784	舟山　昭三	〃
4151	県立福島高校山岳部	〃
5307	関谷　清	信濃
6105	千葉　敏夫	〃
7062	富成　常幸	〃
7171	小山　一武	〃
7284	小林　照雄	山梨
5302	鈴木　璋一	静岡
6468	松井　省始	〃
3789	高村　輝行	東海
6154	阿部　浩道	〃
6308	奥崎　竜太	〃
6626	小川　幸恵	〃
6746	佐野　修	〃
5616	西岡　譲次	岐阜
7460	西　公一郎	石川
3538	岡　希世史	関西
4689	小泉順太郎	〃
4951	伊藤　祐彦	〃
5526	東谷　時夫	〃
5746	宮本　貞雄	〃
5820	室井　克之	〃
5937	西山　孝	関西
6813	神山　義明	〃
6908	西尾　祐治	〃
7023	徳田　洋司	〃
7127	安岡　俊三	〃
7201	吉村康太郎	〃
7315	知久　明	〃
7448	中村　真雄	〃
7473	寺島　滋	〃
7621	原田　志津	〃
7625	合田　敏夫	〃
6532	田中　潤一	山陰
6617	中村　富雄	〃
6833	槇戸　航	〃
4095	重村　伝平	福岡
5131	小田　秀夫	東九州
5351	長谷部勝也	その他
5364	坂本　桂	〃
5485	橋本　信行	〃
6172	岡山大学山岳会	〃
6300	磯弥　須彦	〃
6399	加藤　祥倶	〃
6828	野口　勝志	〃
6853	今成　征三	〃
6954	水谷　健	〃
7065	鈴木　敏秀	〃
7283	伊藤　守	〃
7286	亀岡　啓一	〃
7551	伊藤　昱夫	〃
7555	藤田　正巳	〃
6851	遠藤　泰司	海外

合計　103名

会務報告

4月理事会

（4月9日午後6時本会ルーム）

▽**出席者**　今西会長、織内、望月各副会長、浜野、高遠、山本健、小倉、大森、皆川、大倉、黒石、田村俊、神崎、橋本各理事、林、太田各監事、浜野、折井、宮下各評議員　**委任**　近藤、山本良、原、浜口、浅田各理事

▽**議案**

・昭和50年度事業報告　（浜野）
承認

・昭和50年度収支決算および財産目録　（高遠）
承認

・山研建設関係収支決算　（山本健）
承認

・昭和51年度監事候補者の推薦が評議員会で行なわれた　（浜野）
候補者　太田　敬氏、飯野　亨氏
了承

▽**報告事項**

・ナンダ・デヴィ登山隊　（宮下）
渡辺兵力総隊長は健康上の理由により遠征中止

・カメット登山隊　（黒石）
準備は順調に進展している。出発予定4月25日

・山研　（小倉）
オープン予定5月22日

・集会　（神崎）
51年度計画は各委員会行事と同時に検討し、企画

・指導　（大倉）
第17回登山技術講習会5月22日～24日、穂高、岳沢

・海外連絡　（田村俊）
今年度UIAA総会（スペイン・バルセロナ）に織内副会長出席予定

ルーム日誌（51年4月）

1日（木）　登山講座研究会、ナンダ・デヴィ委員会
2日（金）　指導委員会、婦人部集会
5日（月）　婦人ヒマラヤ研究会
8日（木）　海外連絡委員会
9日（金）　理事会、評議委員会
12日（月）　集会委員会、婦人ヒマラヤ研究会
13日（火）　学生部
16日（金）　婦人懇談会
19日（月）　集会委員会、婦人ヒマラヤ研究会
24日（土）　支部長会議　総会
26日（月）　集会委員会
27日（火）　登山技術書編集委員会
カメット壮行会
四月中来室者四二〇名

会員異動

退会者

三三七三　伊藤　幸次郎（51・4・3）
二二四一　三木　正一（51・4・5）
六〇八三　伊藤　政治（51・3・31）
七六三一　大久保顕成（51・3・31）
六九七五　上野　武（51・3・31）
五九六六　斎藤　哲雄（51・3・31）
五三六〇　柴田　晴彦（51・3・31）
五五四三　若井　秀友（51・3・31）
三九〇三　村川経一郎（51・3・31）
四九〇〇　塩原　節子（51・3・31）

改名者

七二八六　亀岡　弘昭（51・4・19）

物故者

六六二八　細井　孝雄

（訂正）

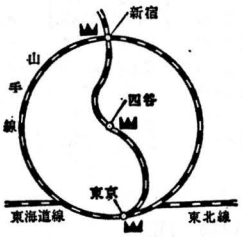
・「山」三七一号会員異動欄のうち、退会者松田柳子とあるのは事務上の手違いのため取消し、訂正いたします。

・同号11頁二段一～二行目「三八の女性が……」は「二人の女性……」に訂正。

昭和五十一年六月二十日発行
113 東京都文京区湯島一―六―一
利根川商事㈱さくらビル
発行所　社団法人　日本山岳会
発行者　今西錦司
編集代表　大森久雄
（813）二二八六（代表）
振替口座東京三―四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所　株式会社　技報堂

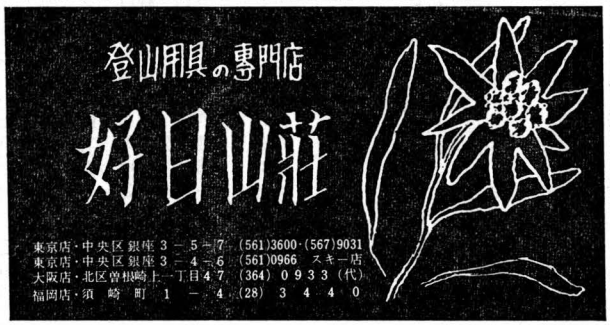
登山・スキー用具専門店
山の店
大阪市北区梅ケ枝町101
TEL. 06(362)5736
●買い易い山の店
●北へ来たら山の店
●フレッシュな山の店

山とスキーの専門店
片桐
東京都文京区湯島3丁目38－9
片桐盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番



四谷店 東京都新宿区三栄町三番地 TEL (351) 7432・1912
八重洲口店 東京都中央区八重洲二の五 TEL (271) 1560・8575
新宿店 新宿ステーションビル四階 サービスショップ TEL (352) 6564
日本信販加盟店
山友社 たかはし

登山とスキー具
イワタ
東京都中央区日本橋通2－1
PHON; 271—7686・1718



「山の本」ご案内

一原有徳 **小さな頂**
北海道の小さな山の頂きと頂きそのものが小さいのと。
A五判三五八頁 定価二九〇〇円

山下一夫 **かんあおい**
高山植物に精通し、山の花、野の花を愛し綴った紀行集。
A五判三〇三頁 定価二六〇〇円

初見一雄 **すこし昔の話** 千島・樺太 札幌・信濃
北千島や樺太国境での特異な体験を混えた青春放浪記。
B六判三三四頁 定価一二〇〇円

川崎精雄 **雪山・藪山**
会津や越後の山々の旅情を吐露した詩味溢る紀行随想。
A五判三四〇頁 定価一二〇〇円

麻生武治 **我がスキーシュプール**
万年青年タケさんの生きている近代日本のスポーツ史。
B六判三八八頁 定価三四〇〇円

坂本直行の本
山・原野・牧場
—ある牧場の生活—
A五判一六〇頁 定価一五〇〇円
原野の生活は自然のもつ厳しさ、暖かさ美しさが交錯して香り高いロマンを奏でる。

開墾の記
A五判二三〇頁 定価一四〇〇円

日本山岳会編 **一九七六年版 山日記**
山好き同志の贈り物！しゃれたプレゼントカードつき。
A六ポケット判 定価九五〇円

●お買上、ご注文は最寄り書店でどうぞ！

茗溪堂 〒一〇一 東京都千代田区神田駿河台二の一 電話〇三—二九一—九四四二 振替東京八—二四七二三

山岳名著選集

最新刊発売中

遥かなる天山 天山に魅せられた探検家セミョーノフ伝

アルダン・セミョーノフ著＊田村俊介訳＊A5判＊二、五〇〇円

ロシアで最も著名な地理学者であり「ロシア探検家の父」と謳われたピョートル・ペトロヴィッチ・セミョーノフの伝記である。セミョーノフは一八五六、五七年の二回にわたり、中央アジア探検を行ない、異種族の度重なる襲撃下をコザックに守られながら天山山脈の奥地へ入りこんで探索を続けた。また、セミョーノフに続くロシア探検家群を綴る。

パミール シルクロードの城塞

田村俊介編＊A5判＊二、五〇〇円

長い間、ソ連領パミールは世界に門戸を閉ざしていたが、一九七四年、国際パミール・キャンプが開催され、その雄大なる全容を現わした。本書は、その際のレーニン峰遠征登山記に加え、パミール全般の地理や探検史について記述し、諸々の資料を収録した。パミールに関する書物の少ないわが国で、本書は、パミールを志す人々のよき参考となろう。

エヴェレスト登頂記

ジェームス・アルマン著＊丹部節雄訳＊A5判＊二、五〇〇円

本書は、一九六三年ノーマン・ディレンファースを隊長とするアメリカ・エヴェレスト遠征隊登頂の公式記録であり、記録係ジェームス・アルマンの執筆によるものである。世界の屋根ヒマラヤに君臨する世界最高の巨峰にどのように挑んだか、物量と科学調査にもとづいた詳細な記述があり、山岳関係者の間で貴重な登頂記録と評価される好著である。

好評既刊

冬のアイガー北壁初登攀

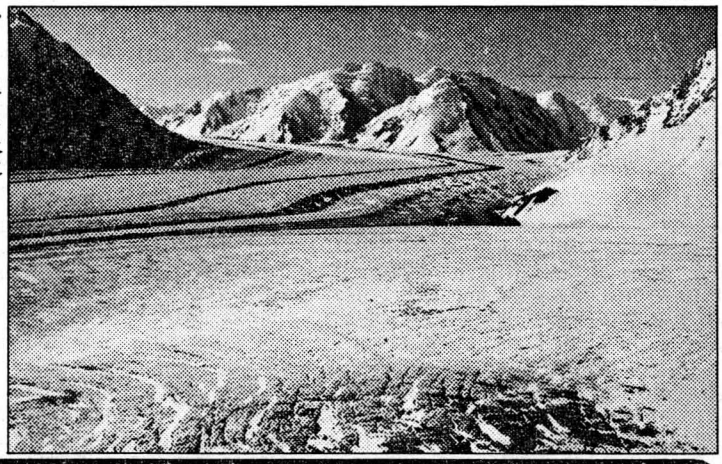
トニー・ヒーベラー著＊横川文雄訳＊A5判＊一、二〇〇円

永い間アルピニストの限りない夢をかきたて、幾多の生命を奪ってきた真黒な怪奇なアイガー北壁に、四人のザイル・パーティが挑んだ。一九六一年三月十二日のことである。計画者・ヒーベラーが仲間選びから計画の完成、実行までを克明に記した〝冬のアイガー北壁初登攀成功〟の全記録である。

ダウラギリ登頂

マックス・アイゼリン著＊横川文雄訳＊A5判＊一、五〇〇円

この書は、一九六〇年五月、地上に残された八〇〇〇m未登峰〝白い山・ダウラギリ〟に挑み、初登頂に成功したマックス・アイゼリン指揮によるスイス・ヒマラヤ遠征隊の公式報告書である。偵察と輸送のために小型飛行機を使い、ヒマラヤ登山史に新しい頁を書き加えたこの遠征隊の全記録である。



ベースボール・マガジン社 〒101 東京都千代田区神田錦町3 3 TEL03(291)7901